



第十四回

九島院 修養会

～ 後水尾法皇 ゆかりの地を訪ねる
京普茶料理を食す ～

平成20年11月3日（祝）

ご挨拶

当院第十四回修養会にご参加頂き有難うございます。

本年は、後水尾法皇ゆかりの地として、国指定の名勝庭園
京都の円通寺を拝観いたします。また、黄檗宗の閑臥庵にて
京普茶料理をいただきます。午後には、社会見学として、
ビール工場の見学を行います。秋天の下、京都の地を堪能いた
しましょう。

合掌



当院第廿五代住職 奥田啓知 九拜

旅程表



九島院 → 阪神高速・名神高速 → 円通寺拝観
8:30 10:20~11:00

→ 閑臥庵拝塔・昼食（京普茶料理）
11:30~13:30

→ お買物（紅へにがら 京都駅八条口徒歩5分 075-671-9390）
14:00~14:40

→ サントリー京都ビール工場（社会見学）
15:30~16:30

→ 名神高速・阪神高速 → 九島院 17:30 到着予定

見どころ

大悲山 円通寺 (臨濟宗 妙心寺派)

借景庭園で名高い円通寺は、後水尾天皇が営んだ幡枝（はたえだ）の御所跡に建つ、臨濟宗 妙心寺派の禅寺。

延宝6年（1678）、文英尼を開基として創建された。客殿の東面にある庭は、苔と石、刈り込みが配された端正な風情で、深い奥行きを感じさせる。生垣の向こうに竹林があり、はるかに比叡山の稜線が見える。後水尾天皇がながめた庭の美しさを今に伝える名勝庭園である。



瑞芝山 ^{かんがあれ} 閑臥庵 (黄檗宗)

山号を瑞芝山(ずいしざん)という黄檗宗の禅寺である。もとは梶井常(かじいじょう)修院の宮の院邸であったが、江戸時代前期に後水尾法皇が、夢枕に立った父・後陽成天皇(ごようせいてんのう)の言葉に従って、王城鎮護のために貴船の奥の院より鎮宅靈符神(ちんたくれいふしん)をこの地に勧請(かんじょう)し、初代隠元(いんげん)禅師から六代目の黄檗山萬福寺 管長千呆(せんがい)禅師が開山となって寺としたのが当寺の起こりである。

北辰鎮宅靈符神は十干十二支九星を司る縦守護神である。

御所の祈願所として法皇自ら「閑臥庵」と命名し、御宸筆(しんぴつ)の額を寄せて勅号(ちよくごう)としたほか、法皇は、春に、秋に、和歌を詠んで庭を愛でたといわれ、秋の句

「明けぬとて 野辺より山に入る鹿の

あとふきおくる 萩のした風」

など、御宸翰(しんかん)その他が今も伝えられている。

また、法皇も好んだ黄檗宗特有の精進である普茶料理が、今は教化の一部として一般に饗(きょう)されている。

現在、開山330年記念事業として

『砂曼茶羅の神秘なる 空間』を行っています。



昼食 (齋会)^{さいえ}

京普茶料理 閑臥庵



肉や魚を一切使わない（出汁にも使わない）、すべてが野菜や豆、穀類から作られる、という普茶の大前提は守りながらも、盛りつけ、飾り包丁には、いわゆる京料理の技がふんだんに使われてる京普茶料理。まるで京菓子のようにです。

萬福寺で修行をした庵主（女性の住持）さんが、手伝いの女性とともに、すべてご自分で作っておられます。普茶料理とは、中国風の精進料理で、油を巧みに使うのが特徴で、薬膳料理と相通じるものがあり、材料からしても非常に健康的で、これを食し続けていた黄檗の高僧は、おしなべて長生きだったといわれています。元来、普茶席は、四人が一卓に対座し一器一碗から一品ずつ、給仕なしでいただくものですが、当庵はこの禅家の簡素な食礼に手を加え趣向をこらした上で、後水尾法皇が好まれた三百年来の伝統の味を広く世間に広めるために二人から召し上げられるように致しました。

（閑臥庵 公式ホームページより抜粋）

周辺MAP



圓通寺 左京区岩倉幡枝町389



閑臥庵
北区烏丸鞍馬口東入278



サントリー 京都ビール工場
長岡京市調子3-1-1

摩訶般若波羅密多心經

観自在菩薩 行深般若波羅密多時 照見五

蘊皆空 度一切苦厄 舍利子 色不異空 空不

異色 色即是空 空即是色 受想行識 亦復

如是 舍利子 是諸法空相 不生不滅 不垢

不淨 不增不減 是故空中 無色無受想行識

無眼耳鼻舌身意 無色声香味触法 無眼界

乃至無意識界 無無明亦無無明尽 乃至無

老死 亦無老死尽 無苦集滅道 無智亦無得

以無所得故 菩提薩埵 依般若波羅密多故

心無罣礙 無罣礙故 無有恐怖 遠離一切顛

倒夢想 究竟涅槃 三世諸仏 依般若波羅密

多故 得阿耨多羅三藐三菩提 故知般若波

羅密多 是大神咒 是大明咒 是無上咒 是

無等等咒 能除一切苦 真実不虛 故説般若

波羅密多咒 即説咒曰 羯諦羯諦 波羅羯

諦 波羅僧羯諦 菩提薩婆訶 般若心經

(食事の前に読むお経)

五観の偈

- 一つには功の多少を計り彼の来處を量る、
- 二つには己が徳行の全闕を付って供に應ず、
- 三つには心を防ぎ過貧等を離るるを宗とす、
- 四つには正に良薬を事とするは形枯を療ぜんが為なり、
- 五つには道業を成ぜんが為めに正に此の食を受くべし。

意味

- 一つ…この食物が食膳に運ばれるまでには、幾多の人々の労力と神仏の加護によることを思つて感謝します。
- 二つ…私どもの徳行の足らざるに、この食物を頂くことを過分に思います。
- 三つ…この食物にむかつて貪る心、厭う心を起こしません。
- 四つ…この食物は、天地の生命を宿す良薬と心得て頂きます。
- 五つ…この食物は道業を成ぜんが為に頂くことを誓います。

大阪市史跡・龍溪禪師墓所

黄檗宗

靈龜山

九島院



ホームページ

九島院

検索